研究論文

異文化理解のための民族衣装の教材化（2）
—グローバル人材育成のための民族衣装学習の構想—

豊田かおり＊　栗山丈弘＊　米田紀子＊

The Use of Folk Costumes as Teaching Materials for Cross-cultural Understanding II

Kaori Toyoda*　Takehiro Kuriyama*　Noriko Yoneta*

要旨

本研究では、ファッション教育において、グローバル人材育成のための民族衣装学習として、異文化理解を育みながら、民族衣装について多角的に学ぶ教育実践を試みた。小さな人台を利用して1枚の布から作る「民族衣装を作ってみよう」（シミュレーション教材）と写真カードの「民族衣装を分類してみよう」（フォトランゲージ教材）と国立民族博物館の資料「みんぱっく」（アンデスの玉手箱）を活用し、実際に本物の民族衣装に触れながら、民族衣装について学ぶ授業計画を立てた。さまざまな国の風土、文化といった地域性と服型の関係についても学び、民族衣装の魅力について考察する。文化の多様性を視覚的に表現する文化的財産でもある民族衣装はファッションデザイナーのインスピレーションでもあり、時には流行の一翼を担うほどの魅力を持つ。学生は民族衣装について学習した上で、そこから学びえた知識を応用した課題（スタイリング雑誌作成）をおこなうことで、「多角的視点に立った異文化理解」とスタイリング技術を同時に学ぶ。これらの授業計画・実施において、ファッション教育の現場で「民族衣装」についてどのように展開すべきか考察した。

（キーワード　民族衣装：Folk Costumes，グローバル人材：Global Human Resources，参加型学習：Participatory Leaning，文化的多様性と共通性：Cultural Diversity and Commonality）

1.　はじめに

文部科学省が推進する「グローバル人材育成推進事業」では、若い世代の「内向き志向」を克服し、国際的な産業競争力の向上や国と国の絆の強化の基盤として、グローバルな舞台に積極的に挑戦し活躍できる人材の育成を図ることを推進している。筆者らはファッション教育の視座から、「グローバル人材育成戦略」[1]で指摘されているグローバル人材の3要素の一つ「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」を育む教材・カリキュラムについて検討し、民族衣装を用いた教材を開発し、本学会論文誌vol.18「異文化理解のための民族衣装の教材化」を報告した。本稿は、その継続研究に位置づけられる。前稿においては、民族衣装のカタチ（形態）を切り口に教材化を試みたが、民族衣装の教材的な価値はそれだけでなく、他方、グローバル人材として求められる異文化理解に関するコンピテンシーもまた、文化の共通性と多様性だけではない。本研究では、民族衣装を用いた異文化理解を育む教材のキーコンセプトとして、以下の点を掲げ、教材開発を行い、実践した。

〈異文化理解を育む民族衣装の教材化のキーコンセプト〉
- カタチの共通性と多様性（commonality・diversity）
- 民族衣装の地域性・独自性（localization・originality）
- 民族衣装の変容とアイデンティティ／倫理（acculturation・identity・moral）

＊文化学園大学

2. 民族衣装を学ぶということ

(1) 異文化理解の第一歩として

文化学園大学現代文化学部国際ファッション学科のスタイリスト・コーディネーターコース3年次必修科目「スタイリスト論Ⅱ」において、服装史のコスチュームや民族衣装を用いて異文化理解の本質を学び、デザインやスタイリングに応用する力を育むことを目的とした授業を行っている。民族衣装について学ぶカリキュラムを見直し、再構築・実践し、学生の態度・理解度・知識がどのように変容していったかを考察し、より学習効果の高い教材について検証した。前年には、1コマ(90)分の実験授業を行ったが、今回はワークショップ、講義、ハンズオン、プレゼンなど様々な授業形態を取り入れ、より実践的な授業計画をした。

民族衣装はデザインの宝庫であり、毎シーズン、さまざまなデザイナーがデザインの源泉をそこに求めている。ただし、浅薄な認識によって民族の怒りを買うなど文化摩擦を引き越しかねないこともあるということをまず認識しなければならない。

ジョアン・フィンケルシュタイン（成実弘至訳）『ファッションの文化社会学』の冒頭には、デザインした服に対してデザイナーの意図とは異なる解釈がなされたために売り場から服を下げるような事態がいくつか記されている。

1994年シャネルのカール・ラガーフェルドはグレーの真珠でコーラン詩節を縫い込んだ細身のボディスを発表。これがイスラム教徒の感情を逆撫でした。シャネルはマスコミの反響後、売り場からこれらの服が下げることになった。

1982年インド政府の招聘をうけてザンドラ・ローズがインド産織物のプロモーションをおこなったとき、ローズは伝統的な民族衣装サリーを引き裂いたり、裾を破いたりしたものを発表。それをインドではデザインではなく、侮辱としか受け止められなかった。

デザイナーはスキャンダルを意図してデザインしたわけではなく、ファッションジャーナリズムがこうした状況をクローズアップし、問題をつくり出している面もある、とフィンケルシュタインは指摘している。

ファッションを学ぶ学生が民族衣装について調べ、それらからインスピレーションを得てファッションをデザインする際、衣装だけでなく、その民族を知り、理解・尊敬し、その社会的背景・文化も同時に学んだ上で、デザインに起こすのでなければ、前述のように何らかの誤解を招く恐れがある。

民族衣装の学びを通して異文化を理解するということは、思考の幅を広げ、国際的視野に立ったものの考えができるような人材が育つという有用性が認められる。

本学の服装学部服装社会学科服飾文化コースの「民族服飾A」を担当している北方晴子氏は、「授業の最終目的はパリやミラノやニューヨークなどで行われているファッションショー、コレクションを見る目を養うことにある」[2]という。民族衣装に関する造詣が深ければ、現在のコレクションの分析にも一役買う。「ファッションを自分のことばで語れること」が北方氏の目指す人材であるという。国際ファッション文化学科における「民族衣装の学び」は異文化や他国の民族について理解をした上で、クリエーション力・表現力につなげていきたいと考えている。そのためにグループワークをしたり、スタイリングマップを実際に制作するなど実習を伴った授業形式を採用している。

(2) 異文化理解・グローバル人材育成の一環

ファッションデザイナーの田山淳朗氏は、3つの要素からデザインを考えるという[3]。それは、「時代」、「地域」、「抽象」である。「時代」の要素としては1960年代、70年代、80年代など10年毎に流行したスタイルやファッションデザイン、あるいはさらに時代を遡り、ロココ時代、バロック時代など、西洋服飾史に登場するコスチューム、建築、芸術品、家具、調度品などである。「地域」の要素としては、地球上のあらゆる地域の民族衣装、民族独自の柄などが染織されたテキスタイルデザインなどである。「抽象」は、時代にも地域にも捉われないその他のもの、感情や思想・哲学

など「具象化できないもの」もこれに含める。

高田賢三は1970年代、コレクションにおいて、ルーマニア・ルック、ギリシャ・ルック、チャイナ・ルックなどの民族衣装に独自の美意識「カワイイ」という付加価値を付けたデザインを展開し、パリを席巻した。時代は民族意識が高まっていく気運の中、高田賢三は時代の寵児となり、このジャパニーズ・デザイナーは、パリの名誉市民としての地位を獲得するに至っている。

また、「カワイイ」は21世紀、欧米ではかなり認知され、サブカルチャーの世界でジャパニーズ・カルチャーとしての文化的価値の付随した言語となっている。「カワイイ」は日本文化がグローバル化した一つの典型であるといえる。

「スタイリスト論Ⅱ」では、授業の到達目標として現在のファッションの流行について考察でき、目的に応じたスタイリングの提案ができることを設定している。その第一段階として、民族について学び、風土に根差した機能性と民族衣装の本質である「飾る」という装飾性を見事に融合させた芸術作品でもある民族衣装について学ぶ。また、地域ごとに異なる多様性や、政治・歴史とともに移り変わっていった民族衣装の文化変容についても学ぶ。

(3) 民族学と民俗学と民族衣装

民族学はethnologyであり、言語・宗教・歴史・運命を共有する人種の社会的な共同体に関する学問である。民俗学は、folkloreであり、一般市民common peopleの間に伝承する習俗を研究し生活文化との関連を究明する学問である[4]。民族学は、世界各地に大社会集団を形成している人種・国家を単位とする広域共同体を対象とし、民俗学は、基底文化の担い手としての地方に暮らす人々の生活内容を対象とする点に相違がある。

民族は生活様式や文化に影響を与えるその土地の風土によって形成される。地誌的起源が同一で、言語・文化伝統が共通する社会集団である。人種は単一とは限らないので、人種は民族の定義に該当しない。風土別にみると、海洋民族、砂漠民族、山岳民族、草原民族に分けられる。

民族衣装の定義としては、「民族の特性を表す歴史衣装」ということができる。これは、その民族の最盛期に特徴づけられた場合が多いためである。

元来、衣服は原始以来の衣服の機能として「身体保護」と「装飾」の2つがあり、その装飾に民族性が色濃く反映されてきた。さらに、民族衣装の社会的機能として、階級・年齢・職能の識別と未婚・既婚の識別がよくみられる。ボガトゥイリョフは『衣裳のフォークロア』において、「衣裳を記号として読み取る術を学んでゆかねばならない。ちょうど、違う言語を読んで理解する術を学んでゆくことと同じように」[5]と述べている。民族衣装は共同体社会の集合表象と言える。

かつて集団社会は、処女だけに「娘」の服を着用し、処女は既婚女性の服を着てはならなかった。また、未成年で未婚で妊娠した場合、社会的制裁として、「娘」の服は着られなくなるところもあった。処女性に価値を置く民族が世界のあちこちにあった。社会内部の社会的差異にも民族衣装は使われる。よって、民族衣装を身につける場合、言語機能と同じように一定の文法構造に則した規範に従わなければならない。世界各地の祭の衣装を見ても、強い情緒性を他者に対して排他的に表現し、地域共同体としての集合意識を喚起・再確認する材料となっていることがわかる。つまり、他者に象徴コードを喚起することによって民族の成員であることの「意味」を伝達する民族衣装は「言語機能」を持つということができる。

(4) 日本の風土とファッション

2011年1月国際ファッション文化学科では、ファッションデザイナーの森英恵氏の特別講演を開催した。そこで、森氏は、日本人が自分の国の文化を知らな過ぎることを嘆いていた。海外で活躍するファッションデザイナーがよく口にしていることでもある。

本来、日本の伝統家屋は「夏」に対応できる構造になっている。家屋に関しては、家は常に外の自然に対して開かれてきた。縁側は外に対して解放され、障子は中は見えないが、外気や光を巧み

に取り込む。自然と断絶せず人間の延長上に自然があった。

着物も日本の家屋同様、夏に対応した形になっている。前開き型の開放型で寒さに対しては重ね着をしたり、綿を詰めた着物を羽織ったりという手段で対応してきた。これは小川安朗『民族服飾の生態』にあるように、夏湿冬乾の日本では、調節困難な暑熱に対応する服装すなわち防暑の型式を取らざるをえないため裕寛開放的で防暑的な前開き型、キモノ型へ展開してきた。

安土桃山時代、織田信長と交流のあったルイス・フロイス（1532-1597）の『日欧文化比較』では、日本人の衣更えについて言及している。ポルトガル人の衣装はほとんど1年の四季を通じて同じであるのに対し、日本人は夏帷子、秋袷、冬着物と1年に3回変える。夏帷子は裏のない単、秋袷は裏打ちされた着物、冬着物は袷に綿の入ったものである。形は夏向きのまま、着物を重ねたり、中に綿を入れたりすることによって寒さ対策をしていることがわかる。日本人の住まいと着物の文化を学ぶということは、日本人の気質や性格を把握する上で非常に有効な学習材料と言える。

(5) 民族衣装の言語的機能

タータンは、スコットランドの民族衣装であるが、現在ではファッションの素材として世界中で使用されており、老若男女に愛用されている。

タータンを育んだケルト民族は、ピクト人と呼ばれていた。ピクトゥス（彩色された）という語に由来された言葉であり、ピクトールとは、ラテン語で絵描きのことである。つまり、ピクト人は「多色使いの布、つまりタータンを作る能力を示したもの」という意味で、タータンはスコットランド人のシンボル・アイデンティティであった。スコットランドでは、血縁関係の団結を重視する社会制度 「クランシップ（氏族制度）」を形式し、氏族ごとにタータンの柄が作られた。常に敵対、戦場で敵・味方を見分ける役割を担っていた。柄を見ただけで、どの居住地にいる人間か識別できた。これは民族衣装の言語的役割を示した例である。

日本の平安時代の唐衣裳の季節に合わせた色のグラデーションやインドのサリーの婚礼衣装に用いられるモチーフなども言語的機能を持ち合わせており、それによって成り立つコミュニケーションが存在する。

フィンケルシュタインは、洋服は「着る人の内面の地図」[6] と述べている。服は内面をうつす。ましてや民族衣装は個人のみでなく、その社会をもうつす。衣装で持って言語機能の果たすのは、民族衣装の役割であるとも言える。

3. カリキュラム構想（単元計画）

「スタイリスト論Ⅱ」では、文化的価値とファッションの関連性についての学習計画を作成した。風土に根差した民族衣装のオリジナリティや多様性について学ぶ。そこからインスピレーションを得て展開させたファッションデザインについて考察する。さらには、課題として「民族衣装からインスピレーションを得たファッション・スタイリングの雑誌ページ作成」を行う。最後は自分たちの作品をプレゼンテーションし、互いに批評し合い、異文化理解を深めていく授業を計画した。

表1のように授業計画を立て、その中の「地域性を持つファッションとその文化的背景を学ぶ」ことに焦点を当て、授業を計画した。

表1 「スタイリスト論Ⅱ」授業内容

＜授業目的＞ 実践的な学びを通してスタイリストに必要な資質とスタイリストのクリエーションについて学ぶ。
＜授業計画＞ ・時代性を持つファッションとその文化的背景について学ぶ（1920年代から1990年代のファッションの特徴を捉える） ◎地域性を持つファッションとその文化的背景を学ぶ（民族衣装を参考に） ・流行とスタイル、時代性や地域性と美意識について考察 ・スタイリング企画（雑誌企画・CM企画）

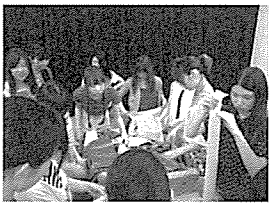
授業目的を「実践的な学びを通してスタイリストに必要な資質とスタイリストのクリエーションについて学ぶ」とし、実践的な授業をおこなった（表1）。

表2はその学習指導案である。「世界の民族衣装 ～カタチの多様性と共通性、そこからの独創

性を育む」というテーマで5コマを使い、実践的な授業をおこなった。

1次の授業「民族衣装を構造から学ぶ」では、教材は、2012年に同授業で活用したシミュレー

表2 「世界の民族衣装　～カタチの多様性と共通性、そこからの独創性を育む」の学習指導案

展開計画			
	主な学習活動と学習者の意識	学習形態	留意点
1次（1時間）	「民族衣装を構造から学ぶ」 ① シミュレーション教材を用いて民族衣装をつくる（図1） ② フォトランゲージ教材を用いて4分類について学ぶ ③ （「まく」「あな」「わ」「はく」）（表4）	ワークショップ教材	（栗山丈弘　豊田かおり「異文化理解のための民族衣装の教材化ー教材「世界の民族衣装」の開発と実践ー」『ファッションビジネス学会論文誌　vol.18 2013.3』参照）
2次（2時間）	「世界各国の民族衣装について、その文化・風土・地域性を学ぶ」 ① 民族と民族衣装の定義 ② 文化・風土・地域性について学ぶ ③ 環境気候と服飾定型の関係 ④ 形態別分類 ⑤ 各国の民族衣装	講義	◆プリント配布 ・環境気候と服飾定型の関係 ・形態別分類 ◆PPT資料 ・各国の民族衣装
	「民族衣装の変容とアイデンティティ／倫理」 ① 批判を受けたファッション ② パリコレクションにみる民族衣装風ファッション ③ 外国人デザイナーの手掛ける「ジャポニズムファッション」 ④ 日本人デザイナーの日本人らしさ	講義	◆PPT資料 ・パリコレクション ・外国人デザイナーのデザイン ・日本人デザイナーのデザイン
3次（1時間）	「実際に本物の民族衣装を見て理解を深める」 ① アンデスの風土と文化 ② ディテール研究 	アウトリーチ教材によるハンズオン学習	◆PPT資料 ・アンデスの風土と民族衣装 ◆実物資料 国立民族博物館資料 みんぱっく「アンデスの玉手箱」 ◆授業の感想を書く
4次（1時間＋自主学習）	「地域性を持つスタイリングを雑誌ページとして制作」 （2週間の期間を設け、課題とする） a）地域を1つ決め、その地域をテーマとしたスタイリングの雑誌ページをグループワークで制作する課題 b）実際の服を集め、メンバーがモデルとなり、実際にカメラで撮影ファッション雑誌を切り抜き、コラージュ作成 c）bをパソコン上で作成 d）全て手描きで表現 a～d のうち、1つの方法を選び、PPTにまとめる。	調べ学習および制作	
	「プレゼンテーション」 PPTで課題をグループごとにプレゼンテーション	発表	◆授業の感想を書く

評価計画

【知識・理解】
- 世界にはさまざまな民族衣装があるが、その形はパターンに分類できることを知る。（記述・発言）
- 世界の民族衣装は、その土地の気候や風土、文化と結びついて発達してきたことを理解する。（記述・発言）
- 本物の民族衣装に触れて、その土地の土着文化への理解を深めることができる。（記述・発言）

【技能】
- 分類パターンにもとづき、カードに書かれた情報を読み解きながら民族衣装を分類することができる。（観察）
- 民族衣装への敬意を保ちつつ、ヒントにしたオリジナルのスタイリングを雑誌ページとして提案できる。（制作）

【態度】
- メンバーと協力しグループワークに主体的に参加することができる。（観察）
- 民族衣装に関心を持ち、文化的多様性を肯定的に受容することができる。（記述・発言）
- 民族衣装に敬意を表しながら、学生オリジナルのファッションデザインに取り込むことができる。（制作）

ション教材とフォトランゲージ教材[7]に加え、本物の民族衣装を直接触れることができるように、国立民族博物館の資料「みんぱっく」を用い、異文化理解のための教材として活用した。「みんぱっく」は世界各国の民族衣装や生活の道具など、またそれにまつわる情報や解説がスーツケースに入ったものである。国立民族博物館によると、MINPACKの"MIN"は、minimum［最小（限）の］minor［小さい方の、サブの、2番目の］であり、「持ち運びできる小さな博物館」である。今回は、日本とは緯度・経度が真逆に位置する地域であるペルーの民族衣装を教材として活用した。

2次の授業「世界各国の民族衣装について、その文化・風土・地域性を学ぶ」では、気候・風土によってカタチが異なったり、文化や宗教によってデザインが異なったりしている民族衣装について多角的に見て、その地域に根ざしたデザインやディテールについて知り、「カタチの共通性」、「多様性や民族衣装の地域性・独自性」について学習する。

3次の授業「民族衣装の変容とアイデンティティ／倫理」では、これまでのパリコレクションやミラノコレクションから、民族衣装からインスピレーションを得たデザインを取り上げ、民族衣装の変容について見ていく。図らずも民族の反感を買ってしまったファッションデザインを取り上げ、民族衣装をモチーフにすることの意義・意味について考察する。

最後に民族衣装やその土地独自で発展していった染織物からインスピレーションを得たスタイリングマップをグループで作成し、プレゼンテーションを行う。

4. 実践記録と学びの軌跡

(1) 民族衣装を構造から学ぶ

① シミュレーション教材を用いて民族衣装をつくる

昨年のアンケートにあった「ハサミ」と「ホチキス」だけの道具だけだと、限られたデザインしかできないという意見を反映し、針と糸の使用も可能にし、制作時間を20分から30分に伸ばした。受講学生は2年次までにファッション造形の授業においてシャツ、スカート、パンツ、ワンピース、ジャケット、コートまでを制作をしているため、その知識・技術を活かして制作しようとした学生が多かった。最初から立体裁断をするグループもあれば、デッサンドールの必要寸法を測って計算してパターン制作から始めるグループもあった。着物風の袖のあるもの、襞飾りのあるもの、ティアード風重ね着などディテールにこだわった作品が多く、結果としてバリエーション豊かな民族衣装が出来上がった（図3）。

② フォトランゲージ教材を用いて4分類について学ぶ

民族衣装の写真と説明文がセットになったカード16枚を「「まく」「あな」「わ」「はく」の4分類に分ける作業を行った。見た目と構造が違って、予想以上に苦戦し、全問正解は7グループ中、1グループのみであった。あらかじめ民族衣装について詳しく説明することをせず、教材の説明文と写真のみを頼りに分類するので、考え込む姿もいくつか見受けられた。

(2) 世界各国の民族衣装について、その文化・風土・地域性を学ぶ

「民族と民族衣装の定義」「文化・風土・地域性について学ぶ」「環境気候と服飾定型の関係」は講義の中でプリントを用いながら解説する。

気候・風土に対する態度と国民性と服装に関して小川安朗は『服飾変遷の原則』において「環境気候による服飾の定型と特性」という表にまとめている（表3）。そこで授業では、環境気候の欄を空欄にし、別枠に語群として掲載し、どこにどの気候が当てはまるのかを考えさせて表を完成させた。表4は、民族衣装の「形態別分類」を研究者別に比較したものである。「シミュレーション教材を用いて民族衣装をつくる」と「フォトランゲージ教材を用いて4分類について学ぶ」という実践的授業（ワークショップ）では、田中千代による「まく」「あな」「わ（つつ）」「はく」の4分類を活用したが、研究者によっていろいろな分類

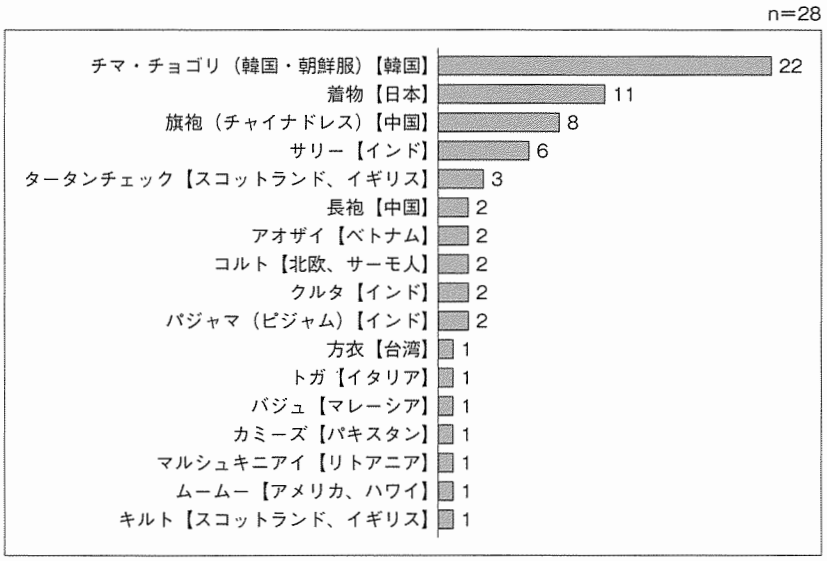


図1　事前アンケート：知っている民族衣装

表3　気候による服飾の定型と特性

環境気候		服飾定型	特性	地域・民族
寒帯極寒		体形型 （四肢包纏）	寒冷と戦う対抗的・積極的・意志的な性格	北極圏、エスキモー、 サモエド、ラップ
熱帯酷暑		腰ひも型　垂布型 （皮膚裸出）	暑熱に対する逃避的・退嬰的な単純性	熱帯、未開種族
砂漠性乾燥		寛裕一体型 （全身包纏）	乾燥に抵抗、自然と同調せず、遮熱的重装	アラビア、シリア、 サハラ
多雨性湿潤		開放一体型 （四肢裸出）	忍従的不活性、遅鈍性生活活動、下肢共包	熱帯アフリカ、アマゾン流域、東南アジア
夏乾冬湿	地中海的明朗	垂布型 （寛裕包纏）	自然と同調、開放裸出、快適な軽装	地中海沿岸、 古代ギリシア、ローマ
	西北欧的曇暗	体形型 （標準礎型）	対外封鎖、四肢分離、環境対応活動的	北欧、古代騎馬民族
夏湿冬乾		夏ー前開型・巻頭型	開放、寛裕、消極性	日本 季節風地域
		冬ー体型型 （四肢包纏）	密閉、緊縛、積極性	

≪語群≫　砂漠性乾燥　夏乾冬湿　熱帯酷暑　寒帯極寒　多雨性湿潤　夏湿冬乾

の仕方があることをここで学ぶ。

各国の民族衣装をアジア、オセアニア、南北アメリカ、中東・アフリカ、ヨーロッパに分け、地域ごとに並べ、映像資料にまとめ、一つひとつそのディテールを見ていった。これは、「シミュレーション教材を用いて民族衣装をつくる」授業後のアンケートで、さらに学びたいことに「民族衣装のデザイン」が最も多かったためである。

学生は、顔を覆い隠すスタイルと宗教上のルールについて知り、覆い隠す布にもさまざまなデザインがあることを知る。サリーなど縫製のない布を巻くスタイルとその多様性について知る。それぞれの民族がさまざまな経験を通して現在の形となった民族衣装について学ぶ。

(3) 民族衣装の変容とアイデンティティ／倫理

「民族衣装の変容とアイデンティティ／倫理」として、民族の怒りを買ってしまったデザインを取り上げ、考察した。また逆に賞賛された作品を取り上げ、なぜ受け入れられたのか、グループで話し合った。その上で、もう一度、民族全体に関わる社会性、宗教、文化について学び直した。民族衣装のディテールを変化させるとき、なぜ、そう変化させるのか、その理由を考えながら変容させることで、異文化理解からクリエーションへと応用力をつけることにつながった。

次にパリコレクションやミラノコレクションなどで発表された、民族衣装をモチーフにした作品を紹介し、その比較を行った。民族衣装をモチーフにしたデザイナー作品として、以下のものを授業で取り上げた。

2005年春夏　ケンゾー（アントニオ・マラス）：アフリカ
2007-08年秋冬　バレンシアガ（ニコラ・ゲスキエール）：アメリカ
2006-07年秋冬　アレキサンダー・マックイーン：スコットランド
2008-09年秋冬　ヴィヴィアン・ウエストウッド：アフリカ
2010-11年秋冬　シャネル（カール・ラガーフェルド）：北極圏
2010-11年秋冬　ジャン・ポール・ゴルチエ：中国
2013SS年春夏　プラダ（ミュウッチャ・プラダ）：日本

民族衣装とファッションデザイナーによる作品を比較し、民族衣装がファッションデザインのインスピレーションになるということ、その表現はそれぞれのデザイナーによって個性やデザイナー自身のオリジナリティが表れてくるということ学ぶ。

(4) 実際に本物の民族衣装を見て理解を深める（ディテール研究）

事前アンケート結果（図1）によると、学生が知っているのは韓国、日本、中国、インドとアジアの国の民族衣装が圧倒的に多い。そこで、日本から最も離れた南アメリカ大陸国の文化・歴史を体現した民族服を実際に触れて学んでみようということで、国立民族博物館の資料「みんぱっく」を用い、異文化理解のための教材として活用した。今回は「アンデスの玉手箱-ペルー南高地の祭りと生活」を選び、国立民族博物館に事前申請をし、届いたものを教室に持っていき、実際に授業中触ってみた。

市田ひろみ『世界の民族服をたずねて』では、インカやプレインカの染織に関する記述がある。羅、ビロード、レース、綴、絞り、ろうけつ、ジャージなどがある。モチーフも動植物やそのアレンジなどがあり、色彩も鮮やかで、アンデスの人々の中に素晴らしい染織技術があったことがわかる。人口の46％が純粋のインディオ、白人13％、混血40％で、インディオは主としてアイマラ族とケチュア族、アイマラ語、ケチュア語を話す。標準語はスペイン語、宗教はスペイン侵略時代に一緒に来たキリスト教が布教され、インディオもキリスト教徒である。現在でも中央アンデス高地の農村地帯では、腰機というインカ時代から続く伝統的な道具でポンチョやマンタ（肩掛けなどの多用途布）や帯などが織られている。ズボンやスカートなどはヨーロッパ伝来のもので、おそらく植民地時代に支配者から強制され、やがて自分たちの普段着に定着したものと思われる。「みんぱっく」はスーツケースに入っており、まず、触るにあたっての諸注意をしてから一つひとつを袋からあけ、順番に手に回して見てもらった。

みんぱっくにはDVDが入っており、そこには農業従事、調理・食事の様子などの動画も見ることができた。みんぱっくには、「ティンタ村の男子祭礼用衣装」「ティンタ村女子祭礼用衣装」があり、それを学生が着用した。着用した学生の感想は、とにかく「暑い」だった。7月という時期だったこともあり、なおさら暑く感じたようだが、高原に生きるペルーの民族衣装の機能性を肌で感じとることができた。ここで注目すべき記述は学生Ｌの「日本人にはなかなか取り入れない色で、いい意味で文化の違いを感じた」と学生Ｆ「ピンクの色使いがすごくて、広い山地でもよく目立つだろうと思った」ということである。自分たち日

本人の好みとの差異を比較したり、遠く風土も異なるアンデスの風景をイメージし、そこに民族衣装を着た生活者がいることを想像したりすることができれば授業の到達目標の1つが達成できたことになる。アンデスの高原において、人の目に鮮やかな色を身につけることは、生存に関わることである。人間の存在を示す大切な意味を持つ色でもある。

(5) 地域性を持つスタイリングを雑誌ページとして制作

今回の課題は、グループで制作すること、最後に全員でプレゼンすることが条件であった。その地域について調べ、どの部分を抽出し、オリジナルなスタイリングに落とし込むかを話し合い、スタイリング雑誌のページを作成した（図4）。制作時間が短かったためと、雑誌編集用のソフトを活用していないため、課題としてのクオリティーは全体としてあまり高いものではなかった。イラストレーター、フォトショップ、インデザイン等の導入や指導案の必要性を強く感じた。

プレゼンテーションもクラス内でパワーポイントを活用して行った。他のグループの作品を見ることで民族衣装への理解が深まり、民族衣装を応用したデザインの多様性について学ぶことができた。

5. 考察

異文化理解を育む民族衣装の教材化のキーコンセプトに挙げた「カタチの共通性と多様性」と「民族衣装の地域性・独自性」においては、民族衣装が気候・風土によって素材、デザイン、色合い等がまったくことなることに驚きと新たな関心を引き起こし、異質なものを認め、受け入れる姿勢を獲得することができた。

民族衣装は伝統、宗教、芸術性が表現されたものである。また、文化の多様性を視覚的に表現する文化的財産でもある。「スタイリスト論Ⅱ」授業最終日にも授業全体の感想を書いてもらったが、29人中7名の学生が、実物の民族衣装に触れることが貴重な経験だったとある。小さな人台を用いて民族衣装を作ったり、カタチごとに分類したり、実際に実物に触れたり、雑誌ページを制作したり、プレゼンテーションしたりと、さまざまな授業形態で行った。次年度の授業計画にはさらに発展させ、模倣からの創造を繰り返し、スタイリング技術の向上を目指したい。今後の改善として、グループで作業する時間も少し増やしたいが、それ以上に民族衣装とその周辺の知識について、自ら調査する力を養いたいと考える。また、さまざま国の文化や民族衣装を講義の中で提示するのではなく、学生が個々に調査し、まとめたものをプレゼンする力を養うことも重要なのではないかと感じた。

また、図2のアンケート「さらに学びたいこと」では、デザインが圧倒的に多く、次に模様や色であった。やはり学生にとっても民族衣装はデザインの宝庫であり、もっと学びたいという意欲が掻き立てられるようだ。

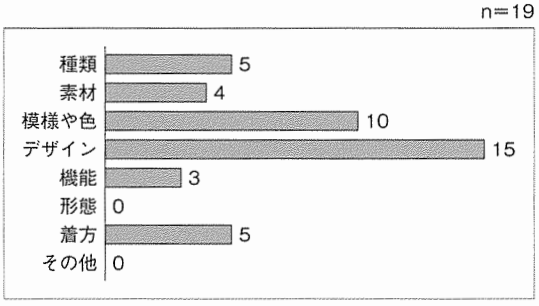


図2　さらに学びたいこと（複数回答）

一方で、ペルーの民族衣装を実際に着た学生の意見として、「初めて本物の民族衣装を手にとることができて感動した。実際にポンチョを着てみたのですが、ポンチョ一枚だけでも暑く感じたので、その地域の気候がどのような感じなのかが分かりました。」とあった。実際の民族衣装を手にとったり、着てみてみたり、その土地に想いを馳せ、その民族になったつもりで想像をして様子がわかる。民族衣装の紹介にとどまらず、さまざまな教材を用いて感じたり、考えたりさせる授業は、遠く離れた土地の民族について学ぶ上で大変効果的であると感じた。

6. おわりに

山本耀司や川久保玲を筆頭として日本人デザイナーがパリで活躍し、評価されている背景には、日本人としてのアイデンティティがデザインに表出されている部分も決して少なくないと筆者は考える。アヴァンギャルドであってもどこか日本的に感じる。逆に外国人デザイナーが日本の着物や伝統工芸などからインスピレーションを得たデザインの中には日本文化の一部を切り取りデフォルメしたものがあり、違和感を覚えることがある。それはハリウッドで制作した日本を舞台にした映画を日本人が観るときに感じるものといったら良いだろうか。それらは日本人として無意識のうちに育んできた文化価値と異質なものである。こういったことはデザインする側の外国人デザイナーも自国の文化アイデンティティを持って解釈するからこのような現象が起こるのではないだろうか。

民族衣装は、民族のシンボルである[8]。民族衣装を学ぶということは、その国の文化の一部を知ることである。流行を生み出すファッションデザイナーやアパレル業界に携わる人々はときには民族衣装をモチーフに現代流に解釈しなおして新たなデザインを生み出している。民族衣装はいわばアイデアの宝庫であり、デザインの潤沢な源泉となる。21世紀においても人々を魅了しつづける民族衣装は、単なる「衣服」ではなく、「風土とともに発展・変容してきた文化」あるいは「情緒という文化」が織り込まれている。よって、世界のさまざまな民族と民族衣装を理解し、多角的な視点から捉えることはグローバル人材育成の推進の一助になると考えられる。

そうした認識を持った上で他民族の伝統服のディテールをデザインに取り入れることのむずかしさと面白さを体験し、異文化理解とクリエーションを同時に進められる人材を育てていきたいと思う。

引用・注釈

1) 文部科学省　平成24年度「グローバル人材育成推進事業」趣旨http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/09/attach/1326084.htm（2013年10月1日アクセス）
2) 2014年2月7日，インタビュー。
3) 文化学園大学現代文化学部国際ファッション文化学科では、著名なデザイナーを招いて特別講演を開催しており、2007年11月にはファッションデザイナーの田山淳朗氏を講師に招いた。その時の講演で、田山氏は

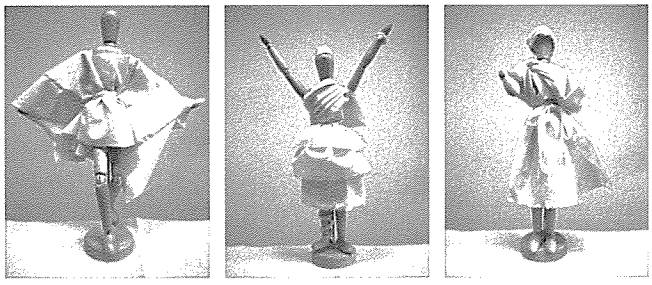


図3 「民族衣装をつくってみよう」学生作品

図4 学生課題「北欧テキスタイルデザインをヒントにスタイリングした子供服の雑誌」

デザインをする上で「時代」、「地域」、「抽象」の3要素から発想を展開すると述べた。

4）小川安朗『民族服飾の生態』東京書籍1979年，p46.

5）P.G.ボガトゥイリョフ『衣裳のフォークロア』せりか書房1984年，p91.

6）ジョアン・フィンケルシュタイン『ファッションの文化社会学』せりか書房，1998年，p47.

7）栗山丈弘　豊田かおり「異文化理解のための民族衣装の教材化　－教材「世界の民族衣装」の開発と実践－」『ファッションビジネス学会論文誌　vol.18 2013.3』pp33-40.

8）杉本正年「民族服成立の条件」『服装文化』服装文化協会1975年，p38.

参考文献

小川安朗『民族服飾の生態』東京書籍，1979年.

小川安朗『服飾変遷の原則』文化出版局，1981年.

杉本正年「民族服成立の条件」『服装文化』服装文化協会，1975年.

井上泰男『衣服の民族誌』文化出版局，1982年.

能澤慧子監修『世界服飾史のすべてがわかる本』ナツメ社，2012年.

丹野郁『世界の民族衣装の事典』東京堂出版，2006年.

田中千代『世界の民俗衣装』平凡社，1985年.

文化学園服飾博物館『世界の伝統服飾』文化出版局，2001年.

高橋晴子監修『国際理解に役立つ民族衣装　絵事典』PHP研究所，2006年.

市田ひろみ『世界の民族服をたずねて』じゅらく染織資料館，1981年.

ジョアン・フィンケルシュタイン『ファッションの文化社会学』せりか書房，1998年.

表4　形態別分類

	小川安朗	能澤慧子	丹野郁	田中千代	
1	腰布型	巻衣① 腰布形式	ドレーパリー （巻衣）	まく	エジプトのロインクロス 布を腰の回りに巻きつける。
2	巻垂型	巻衣② ドレーパリー形式			インドのサリー 1枚の布で全身を包む。
3	貫頭型	縫製服① チュニック式 （ポンチョ・貫頭衣）	ポンチョ （貫頭衣）	あな	チリやタイのポンチョ 頭を通してかぶって着る。
4	前開型	縫製服② 前開型形式 （カフタン形式）	カフタン （前合わせ型衣）	まく	日本の着物、チマチョゴリ 前開きで着用。
5	体形型	縫製服③ 体形衣形式 （上衣と脚衣）	チュニック （筒型衣）	わ（つつ）	西洋の服 人体に合わせ胴腕足等を包む。
			ズボン （脚衣）	はく	

表5　ペルーの民族衣装に触れた感想

A：色がとても鮮やかで模様も細かく、手間がかけられていると思った。
B：気候に適した機能性あるものだと感じた。
C：個人的には関わりのない国なので、面白かった
D：厚手だと思っていたが、意外と厚手ではなく、さわやかな見た目、さわやかな肌触り、高級な感じがした。
E：刺繍がとても繊細で色がカラフルでとても可愛かった。布が固く、しっかりしていたので、寒い場所ならちょうどいいのかなと感じた。
F：ピンクの色使いがすごくて、広い山地でもよく目立つだろうと思った。
G：帽子、ポシェット、スカート留めなどのアクセサリーも色・柄が素敵だった。
H：今日触って、民族衣装にもっと興味が持てた。
I：素敵な民族衣装があるアンデスの地に興味がわいた。
J：マントやネックレスなどの装飾品がたくさんあって、着るのに大変だと思った。
K：本物の民族衣装を手に取ることができて、感動した。
L：日本人にはなかなか取り入れない色で、いい意味で文化の違いを感じた。
M：防寒の対策もしっかりとされており、機能性にも優れていると思った。
O：色使いが激しいと思ったが、着てみるとごちゃごちゃせず、バランスがよく、色や柄は組み合わせを考えて作られていることを感じた。帽子や留め具など細部までこだわってあり、すごいと感じた。
P：帽子の形が不思議で面白い。
Q：全て手作りで、技術がある人たちなんだと感じた。